
Fate Black～黒歴史～

高梁衣忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e B l a c k 黒歴史

【Nコード】

N 4 9 6 5 X

【作者名】

高梁衣忍

【あらすじ】

昔々の事。ハッピーエンドで感動したり、その勇敢さに幼年期は夢中になったり、色々ドラマチックな昔話。だけれど運命は真っ黒でした。まさか一つの企みがこんなことになるなんて…
やりたいほうだいの昔話は、世界波乱物語です

あかずきん

昔々あるところに、あかずきんという一人の、それはそれはロリィタの、いろんなオヤジが好みそうな女の子がいました。

あかずきんは村のみんなの人気者で、誰もがあかずきんを慕いました。

そんなある日

「世界が欲っしい☆」

と、あかずきんは突然言い出しました。

そしてあかずきんは現役時代に殺し屋だったおばあさんを、まずは抱き込みました。

もちろんおばあさんは「おっけーだよ、あかずきん」と言って協力を惜しみませんでした。

次にあかずきんは村の人（オヤジ中心）に協力を求めました。

「みんなー、あかずきんといっしょに、世界を奪ってくつれっるかっなー？」

「（いいともー！）」

こうして村はひとつの国となったのでした。

「（これで村の連中は私のモノ。第一段階は成功ね☆）」

あかずきんは村の人達に『イエスあかずきん！』と毎日言わせることも忘れませんでした。

そしてあかずきんはおばあさんを武器に、唯一反対するお母さんを黙らせることにしました。

もちろん有無を言わずお母さんを黙らせることに成功しましたが、最後の抵抗で、森の猟師さんを仲間につけていたお母さんでしたが、元々殺し屋だったおばあさんの前では全く意味がなく、おばあさんは森の猟師さんを躊躇なく風穴だらけにし、火にかけてむしゃむしゃと食べてしまったのです。これを見たあかずきんのお母さんは、一生あかずきんに尽くすことを誓ったのでした。

こうしてお母さんを奴隷にし、あかずきんはますます調子に乗りましました。

「（次は侵略ねっ☆）」

あかずきんは村の人達におばあさんの指導を受けさせ、あかずきん政権はとんでもないスピードで他国を侵略していったのです。

「他国の王は、すべて暗殺、同盟を結び、最早逆らう者は近辺に一人もいません、あかずきん様！」

「よくやったわ。これで我が国は大分大きくなったわね。これで私の名前も一人歩き間違いナシよ！」

こうしてあかずきんは、ズキン・スカル・スカーレッドと名前を変え、いつしかその国は『レッドキングダム』と呼ばれ、多くの国に恐れられたのでした。

l e t ' s g o ズキン様

周りの全ての国を支配したあの時からしばらく経ちました。
そんなある日、レッドキングダム城内は、なにやら騒がしくなっていました。

「なに？」

「ですから、ほかの大陸。新大陸を発見したんですよ！」

家来の一人が、それはそれは驚きながら、あかず…、じゃなかった。
ズキン・スカル・スカーレッド総帥にそう報告していました。
しかしズキンはしかめつらをしたまま何も言いません。

「（糠喜びさせやがって）」

などとズキンは考えていました。そして直ぐに偵察するように命じたのでした。

「（おばあさん、ごめんなさい。私まだ世界征服出来てなかったみたい。
だから今度こそ、世界の息の根を止めてみせるわ）」

ズキンは、今は亡きおばあさんにそう誓い、世界征服の算段を立て直すのでした。

そんなころ。

城内の兵士たちは何やら騒がしくなっていました。
なんと、賞金稼ぎとして名高い金太郎がズキンの命を狙っている
というのです。

兵士A「どうすんだよ」

兵士B「どうするったってなあ…」

兵士A「やっぱり報告すべきなのかなあ」

兵士B「そりゃあ、なあ…?」

兵士A「そうなるど誰がズキン様に伝えるかということになるが…」

兵士B「……」

兵士A「………」

兵士B「……確か、それを一番最初にそれを知ったのはあいつだよ
な…?」

兵士C「……(ガタガタ)」

兵士B「……」

兵士A「……おい、C?」

兵士C「いやだあ! 俺は絶対にいやだあ!」

兵士B「まあC、落ち着けよ…。誰もお前にやれとはまだ…」

兵士C「俺はまだ死にたくない! この間も敬礼がなってないって、
乳首にゴムパッチン50回やられたんだあ! なのにこんな報告し
にいったら…絶対尻の穴に爆竹の刑だあ!」

兵士A「……」

兵士B「……」

兵士C「うっうっ…(泣)」

兵士A「な、泣くなよC。別の方法を考えよう、な?」

兵士B「そうだよ、この事はまだ秘密にしておこう、な?」

兵士C「A、B…。うつつ、友情って素晴らしいなあ…（泣）」

こうして三人は、ひとまずそんな感じで決意を決めたのでした。

が。

兵士D「…ということです。ズキン様」

「ほう、私に隠し事をするとは。なかなか度胸のある奴等だ。報告ご苦労、下がってよい」

兵士D「ハッ。（これで俺の評価は鰻登りだ。しめしめ…）」

などと、人間の黒い部分が入り混じっているのも、ここの特徴なのでした。

「（さて、どうしたものか。金太郎の噂は聞いている。もし攻めてくるならば、こちらもただでは済まないな）」

ズキンは、兵士Cのお仕置きを考えつつ、金太郎の対策を練りました。

「相手は賞金稼ぎか。よし」

ズキンは決めました。

「お金を積もう」

ヘンゼルとグレーテル

所変わって、ある町に、ヘンゼルとグレーテルというとても仲の良い姉弟がいました。ヘンゼルとグレーテルは年子で、ヘンゼルはお姉さんで、グレーテルは弟でした。

ヘンゼルとグレーテルには両親がいませんでした。お母さんは病で倒れ、お父さんは出稼ぎに出たまま戻って来ませんでした。

けれど、ヘンゼルとグレーテルは、お互いに協力して暮らしていたため、あまり不自由はなく、そこそこ幸せに暮らしていました。しかしグレーテルには悩み事がありました。

姉のヘンゼルの性格に難があるのです。

なんとヘンゼルはシヨタコンなのでした。なので年子のグレーテルにべたべたします。グレーテルはそれが悩み事だったのです。

「なあ？ 弟よ」

「なあに姉さん」

「一緒に寝ないかっ☆？」

「嫌だ」

「早いよ、もうちょっと悩もうよ。お姉ちゃん寂しいよ」

「変態の姉を持つ弟としては恐ろしい限りだよ」

「どうしてさ、一緒に寝るだけじゃない。恐いことなんか、なーんにもないよ」

「いや、朝起きたら姉が裸で横にいる図は恐い」

「暑くってねえ」

「この間、普段着で寒い寒いって言ってたじゃないか」

「グレーテルを見ると、身体火照って暑いんだよねえ…」

「ハアハアすんな。あと、もう寄るな」

「ああゝ！ 弟に悪口言われるのも、良い…！」

「ヘンゼル姉さん、ぼく今日は友達の家泊まるね。帰る目処は立ってないから」

「待って！ 姉さんを一人にしないで！」

などという会話は日常茶飯事でした。要するに、ヘンゼルの変態っぷりに、グレーテルは手に負えないのです。

それでも父が家に居る頃はましでした。親の目の前ではヘンゼルも自重していたのです。けれど父が出稼ぎに出て行ってしまった途端、姉は覚醒したのでした。

「なんで近所の小さい子達は私を見て逃げるのだろう？」

「自覚が無い！？」

「仲良く、したいのになあ…」

「どういう、意味で…？」

「せ、性的って言うのかな？」

「くたばれ、そして果てろ」

「いいじゃない。ちよつとくらい…」

「本気で言ってるの！？ 姉さん！」

「何事も、全力投球です！」

「どや顔すんな」

ヘンゼルとグレーテルはこうして毎日を送っていました。あまり無事のようには見えないけれど、それでも平和に暮らしていました。

そんなある日。

「知ってる？ 姉さん」

「なにをー？」

「新しい大陸が見つかって、またズキン様が戦争をふっかけるらしいよ？」

「へえー、知らなかった」

「あんま興味無さそうだね…」

「戦争は嫌だしねー」

「新大陸は、どれくらい人が居るんだろう？」

「ちっさい子とか!？」

「そりゃ居るだろうけども」

「……（ハッ!） 戦争したら、子ども達が危ないな……」

「……? 姉さん？」

「ちょっと待てよ…（ぶつぶつ）」

「………?」

「…せ、戦争は、あかんだろう……!」

「うん」

「止めなきゃ、なんだろう……!」

「うん。…うん？」

「ついて来いグレーテル。城へ行くぞ!」

「え、はい？」

「ほら早く!」

「ちょ、なにしに!？」

「戦争止めに」

「無理じゃん!!!」

「世界の子ども達を脅かす野郎は、私が許さんー!」

「ええー!？」

こうしてヘンゼルとグレーテルはズキンのいる城へと向かったのです。

ヘンゼルとグレーテル？

レッドキングダム城の下町は、毎日新鮮な野菜や、魚介類が随時買
うことができ、活気溢れる市場は今日も賑わっていました。

そんな中、ヘンゼルとグレーテルは城を目指して、下町の人混みを
かき分けていました。

城へ続く道は、城から延びている一本道の下町ルートが一番早く行
けるのでした。

ヘンゼルらグレーテルを引っ張って、ぐいぐい歩いて行きます。

「ほら、たらたら歩かない！」

「姉さん、止めようよ。僕たちじゃお城には入れないよ？」

「なるようになれ」

「ノープランですか…」

「とにかく行くの！ 立てよ国民！ ってね。……あ、あの男の子
かわいい…！」

「……ていうか、お城行って、ズキン様に会えたとして、どうすん
の？」

「キャー！ めっちゃかわええやん！ もう誘拐したいくらい！」

「…姉さん、きいてる？」

「ハァ、火照ってきた…！」

「おい変態！」

「ん、どうした気苦労人グレーテルよ？」

「僕の心境を理解しつつのその態度か！ ただの嫌がらせじゃねえ
か！」

「おいおい、あんまり大衆の目前で怒鳴るでないよ。…子ども達
が怖がっちゃうよ？」

「大衆のど真ん中で発情してる奴に言われたくねえ！」

「もうちゃんと聴いてるよ、姉さんだってそこまでバカじゃありません。ズキンをどうやって殺すかでしょ？」

「殺すの!？」

「うん」

「それこそ大衆の目前で言っちゃいけないよ！ 考えろバカ姉！」

「やっぱりげんこつで殴って、それから絞首刑かなー」

「お前が吊されるわ！」

「一国の為に…」

「僕はまだ死にたくない！」

「ねえ、英雄グレーテル」

「やめて！ 英雄とか言わないで！」

「国の永遠よ」

「死亡フラグがっ！」

こうしてヘンゼルとグレーテルは城のすぐ目の前あたりまで来ました。下町とお城は一つの橋で繋がっているのです。

「さ、橋を渡れば城へいけるのだが」

「見張りがいるね」

「クソっ、予想外だった！」

「……反応しなきゃ、だめ？」

「いやいや、普通にどうやって行くか考えよう」

「帰る、という選択肢……」

「無い」

「………」

来たはいいいけど、本当に何も考えていなかったヘンゼルは、少し困っていました。

グレーテルは目が死んでいました。

「おいお前達、城の前でなにしてる」

と、突然声をかけられたヘンゼルとグレーテルは飛び上がりました。

「(ね、姉さん!)」

「(バレた!?)」

「(やっぱりそういう事!?)」

「(なんでバレた!?)」

「(知らないよ! あ、あれだよ、プロってやつ!?)」

「おい!」

「(ヤバイ!!)」

「(ヤバイよ!!)」

恐る恐る、ヘンゼルとグレーテルは振り向きました。

次話へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4965x/>

Fate Black～黒歴史～

2011年10月20日16時01分発行